

## シンジュキノカワガ 伊豆で大発生

文：杉本 武、写真：三宅飛鳥



シンジュキノカワガ 成虫



終齢幼虫

シンジュキノカワガ *Eligma narcissus* (CRAMAR, 1775) は大形で美しいコブガ科の蛾である。もともと日本の蛾ではなく、中国大陸の原産とされている。日本では北海道から九州までの各地で記録されているが、非常に稀な種類である。ごく限られた場所に発生するが、その後は採集されない場合が多い。幼虫の食樹はニガキ科のニワウルシ（別名シンジュ：神樹）に限られている。ニワウルシは、中国原産の落葉高木で、明治以降にヤマユガ科のシンジュサンの亜種エリサンから絹糸をとるために、その食樹として日本に導入されたようである。日本における、シンジュキノカワガの記録を見ると、1～数頭の成虫が発見される場合と、ニワウルシの木に幼虫が大発生をして発見される場合とがある。大発生した場合、その後その場所をつづけて発生することはごく稀であり、日本に安定的に定着しているとは考えにくい。現在では、この蛾は中国大陸から、気流に乗って日本に飛来し、ニワウルシがあればそこで産卵して一時的に増殖するが、日本では定着できない偶産種であると考えられている。

静岡県におけるこの蛾の記録は全くなかったが、2023年に至り、2例がほぼ同時期に発見された。1例目は同年8月14日



食べられたニワウルシ



繭

に1♀成虫が伊豆市湯ヶ島から記録された（枝・小林：蛾類通信No307,2023）2例目は、8月22日に、西伊豆町安良里で大発生しているのを筆者が発見したものである。仲間と生物調査の途中に、ニワウルシの木が異常に被害され、葉が一枚も残っていないのを見て、シンジュキノカワガの発生を直感した。10数本のニワウルシの木はほとんど裸状態で、飢えた幼虫が幹や枝を狂ったように歩き回っていた。幹を調べると繭が集団で見つかった。繭を開くと中に赤褐色の蛹が入っていて、触ると体を振ってカサカサという音を出す。一部の繭はヒメアリが侵入して蛹が被害されていた。若齢～終齢の幼虫50頭余りを持ち帰ったが、幼虫は飢えすぎて、与えたニワウルシの葉を全く食べずに衰弱して死んだ。生きた蛹も30頭ほど持ち帰ったが、殆どが死んで、完全に羽化したのは3頭だけだった。